

滋賀大学経済経営研究所に 思いを寄せて

手塚崇生 / 地方公務員

滋賀大学経済経営研究所が、100周年を迎えられることに、謹んでお慶び申し上げます。

私は、大学院の修士生の時に、同所でアルバイトをさせていただきました。主な業務としては、先生方や学生から依頼される資料探しや、先生方の資料作成、同所の皆様の手伝い等をしていました。

私自身も、アルバイトの業務時間外では、一利用者として、授業の資料作りや、論文作成等に、同所を利用していただきました。まるで、琵琶湖のような、深く広い、膨大な資料のデータベースから、的確に必要な資料の見つけ方を教わったり、資料を準備いただき、助けていただいたりしたことを覚えています。

アルバイトの業務時間内では、同所で何気ない日常会話をしたり、和やかな雰囲気の中で業務をしたりして、幸せだったなと思います。

大学院の修士課程院生という、自らで決めて、選んだ道ではあるけれども、社会人として活躍している同級生の笑顔や、学生とは異なる責任感が出てきた背中を見ていると、何だか置いていかれたような、あるいは、孤独感のようなものに悩まされることもありました。

そんな鬱屈した気持ちは、同所に一步入ると、忘れることができました。それが、当時の自分をどれだけ救っていただいていたか、本当に感謝しかありません。

修士論文の作成では、指導教員のご厚意で、修士のゼミ生だけでなく、指導教員の学部のゼミ生等とも交流させていただくことができ、一人では広げられなかった知識や考え方を学ぶことができました。関連する資料を読み解きながら、まとめて、発表し、意見交換をすることで、理解を深めていくことができました。ゼミ生等は、年齢や国籍も様々で、授業での意見交換時や、広い視野を持つ考えを聞いた時も、大いに刺激を受けました。

指導教員からは、様々な角度からの視点を用いて、研究を深く進めることや、先人の研究から何を学び、何を論点にして、これまでの研究との違いを明らかにし、研究の成果とすることができるのか、そのために過程をどのようにしていけばいいのか等、ご指導をいただきました。容易ではなかったですが、同所のスタッフの方々や、様々な方のご協力をいただきながら、

少しずつ形にしていけたのかもしれないな、と振り返ることがあります。

大学院を修了してからも、当時の学友の皆さんと、年に1度は集まる計画をしています。コロナ禍や、家庭の事情、記録的な大雪等があり、全員が集まることは少ないのですが、集まれる時には、指導教員から、研究分野における最新の話題に加え、皆さんの活躍を聞いたり、お互いが元気で会えて良かったといったことや、お互いの家族の成長等をともに喜び合ったりしています。これも、指導教員の研究への熱い思い、お人柄、ご厚意のおかげであると、改めて感謝申し上げます。

現在は、自治体の職員として、「住んでよかった」「訪れてよかった」まちを目指して取り組み、住民の皆様の日々の暮らしをサポートすることに携わっています。時々、業務で上手くいかず、立ち止まることがありますが、そんな時には、同所でのことを思い出します。当時、何者でもなかった自分を温かく見守ってくださった方々を思い浮かべ、今度は私自身ができることは何かを考えることがあります。元に戻れる時間、元に戻れる場所があることを幸せに感じます。前を向き、後ろを振り返り、足元を見つめ、また、前に進む勇気をもっているなど感じます。

今後は、時代に合わせ、同所の在り方は変わるかもしれませんが、同所の和やかな雰囲気や、同所が持つ機能は、そのままであり続けて欲しいと思います。同所は、社会と大学をつなぎ、学生と社会をつなぐ機関であるとともに、社会に開かれた窓口でもあり、大学の知識を社会に還元するといった、なくてはならない機能を有しています。

私も、自治体職員という、まちづくりに携わる一員として、持てる力を、同所のように社会に還元し、いまちにしたい、と強く決意を新たにします。同所の今後のますますのご発展を心から祈念します。また、伺わせていただきます。